



ほぼ完成したハウス

学園諸施設の建設着々と進む

会報第十五号で右橋副学園長が「学園の将来計画」と題してのべられたように、学園は、経営改善計画（昭和四十六年度と五十三年度）を作成し、既に四十六年度分の基礎実験室半棟、女子寮を完成し、本年度も園芸農場の鉄骨ハウス基礎実験室の手機および園芸畜産実習室が、学園の同意、復建建設（一期）の手によって建築が進んでいる。昭和四十八年度以降の整備計画は表の通りである。

同窓会会報

 第17号

昭和47年11月1日
 発行所
 茨城県東茨城郡
 内原町舞南5965
観測学園同窓会
 印刷所
 朝双葉印刷所

自昭和48～53年度経営改善計画修正

昭和47年6月15日

(単位千円)

年度 施設名	48年度			49			50			51			52			53			
	名称	員数	金額	名称	員数	金額	名称	員数	金額	名称	員数	金額	名称	員数	金額	名称	員数	金額	
生産	鉄骨ハウス 建設費	2,560㎡	6,800	ガラス室 建設費	300㎡	16,000	ガラス室 建設費	300㎡	16,000										
	生活用機械 器具等 建設費	200	4,000	成層機 建設費	1式	230	成層機 建設費	1式	230										
生活	生活用機械 器具等 建設費	150	2,900	生活用機械 器具等 建設費	1式	450	生活用機械 器具等 建設費	1式	450										
	生活用機械 器具等 建設費		10,640	生活用機械 器具等 建設費		500	生活用機械 器具等 建設費		500										
小計			24,240			17,180			16,680										
管理	肥料・水 設備等 建設費	350㎡	5,000	肥料・水 設備等 建設費	1基	6,100	肥料・水 設備等 建設費	150㎡	3,000	肥料・水 設備等 建設費	2基	3,600	肥料・水 設備等 建設費	300㎡	9,600				
	肥料・水 設備等 建設費		3,020	肥料・水 設備等 建設費		1,200	肥料・水 設備等 建設費		250			3,400	肥料・水 設備等 建設費		7,760				
教育	肥料・水 設備等 建設費		420	肥料・水 設備等 建設費		300	肥料・水 設備等 建設費		250				肥料・水 設備等 建設費		1,300				
	肥料・水 設備等 建設費		850	肥料・水 設備等 建設費		8,020	肥料・水 設備等 建設費		9,200			6,400	肥料・水 設備等 建設費		16,760				
教育	調理実習室 建設費	170㎡	5,100							教育実習室 建設費	300㎡	20,400	調理実習室 建設費	1,070㎡	36,600	体育館 建設費	320㎡	27,600	
教育	調理実習室 建設費		700							教育実習室 建設費		10,000	調理実習室 建設費		2,500	体育館 建設費	790㎡	21,000	
	調理実習室 建設費		5,800							教育実習室 建設費		20,400	調理実習室 建設費		38,100	体育館 建設費		2,300	
小計			5,800							教育実習室 建設費		20,400	調理実習室 建設費		38,100	体育館 建設費		2,300	
施設	男子学生寮 建設費	353㎡	10,500	男子学生寮 建設費	790㎡	23,600	食堂用 建設費	800㎡	24,000	女子学生寮 建設費	300㎡	11,400							
	男子学生寮 建設費		1,530	男子学生寮 建設費		2,300	食堂用 建設費		10,000	女子学生寮 建設費		2,000							
施設	男子学生寮 建設費		12,130			25,380			34,000			13,400							
	男子学生寮 建設費		12,130			25,380			34,000			13,400							
合計			58,180			51,680			53,938			58,200			85,860			51,300	

学園諸施設の配置計画について

同窓会として意見具申

学園は経営改善計画の実施に伴ない、諸施設の配置計画を作成して、計画的な整備を進める必要性から、丹精建築設計事務所の案を提示して、同窓会に意見を求められた。

同窓会は役員会を開催して、このことについて審議し、四月十六日付で学園に具申しした。その概要は次の通りである。

一、諸施設地域の区分

諸施設の配置を次の区分によりおこなう。

- (一) 教室等、教育建物ゾーン
- (二) 体育施設ゾーン
- (三) 研修施設ゾーン
- (四) 園芸生産施設ゾーン
- (五) 学生生活施設ゾーン

二、正門および道路

正門は、現在の位置とし、他は適当な名称をもった門として整備する。道路については、現在の道路網を尊重し、職員出張、雑務等の整備をおこなう。

三、本館

本館は、現事務室の南側に、視研究教



昭和46年度完成した女子寮

室、経済研究室と木造教室の空間と対照的な広さをとって建設する。尚図書館附属の建物(事務室、経済研究室等)は、創学以来の記念建物として保存することとする。

四、講堂(兼体育館)

当面、体育館を兼ねることとし、建坪を九百平米程度とし、体育施設ゾーン、現基礎実験室北側に建設する。(この意見具申後、計画の修正をみて、講堂、体育館を別個に建設することになった。)

五、体育施設(プール、テニスコート等)。

これらの施設は、グラウンドの北側、教室より学生寮に通ずる道路に、接近して

建設する。

六、学生会館および研修館

建設場所は、備品倉庫、米室隣舎付設とする。

七、庭園

正門より入って左側、および松花寮(旧勤身寮)付近は庭園とする。

八、花木、庭園樹生産園および見本園

正門より入って右側、米室前庭園を生産販売も考えて、花木、庭園樹の栽培および見本園とする。

九、同窓会館敷地

学園長公舎(若竹寮)東側、竹林の一角を同窓会館予定敷地として確保される。

学園長、副学園長再任さる

農民教育協会は九月十八日、役員任期満了に伴ない、理事会を開催、協合理事として協力された寺村秀雄(全販連専務理事)氏を除き、全員を再任した。

翌九月十九日、学園では全職員を招き、役員再任の報告と学園長、副学園長から今後の抱負と協力を依頼する話があった。

学園、諸施設の配置計画を発表

学園は諸施設の配置計画について検討を続けていたが、六月十五日付で暫定案を発表した。これに対し、学生より幾つかの変更申し入があり、正式決定までに

は経典曲折が予想されるが、この計画が骨子となって決定されるものと思われる。

鯉淵精神論

和田文雄

最近、何回か職業上の研修会を主催して十九才から五十五才までの成人男子を相手に三週間ほど生活を共にしてみている。いろいろなものを観察することができたが、研修場所の施設と研修効果との関係について興味を深くした。

その一は研修場所の施設がよいと効果がある。

その二は研修施設がよいのに効果があがらない。

その三は研修施設が悪いのに効果があがる。

まず研修場所の施設（建物、集団生活、講師）がよくて効果があがることは研修を授ける者、受ける者ともに目的に向って突進する状態ができ最大の効果をあげることができる。これは理の当然ということであろう。

ところが、その二のように研修場所の施設がよいにもかかわらず効果があがらないとなると研修を受ける者、授げける者両者に不幸なこととなり目的を失う結果となる。

その三では、研修施設のうちの講師を

除いたものであるが施設に左右されない。この場合講師も含めた場合はその研修は実施しないも同じこととなる。

かつて、鯉淵学園が存在の危機に立つたとき建学の精神について問い糾され、学生も大いに議論したところであるが、建学の精神とは何をさすのであろうか。建学の精神が「良識」におきかえられるときもあつて時の経過とともに少々いただけなくなる場合があらわれる。良識とは現在における最も保守的なものの謂であつてこの用い方に問題が残るのである。

学生や同窓生の間で「鯉淵精神」あるいは「鯉淵の精神」とつかわれている「精神」とは何んなのであろうかといわれども鯉淵の精神とはこれだとかまえて指さして示すことはできない。

これが用いられる言葉の前後から判断して多くそれは三ヶ年の寮生活の中から生れてきているものをさしている場合が多い。それは青春の生活をともにした同志的結合の謂である同じ釜の飯論、共同辛苦論、鯉淵的耐乏論、創立以来建設の連続からの建設論など言い表わしていることと理解することができる。しかしただこれだけに終れば建設現場での飯場生活も同じ釜の飯論となる。

一般に用いられる建学の精神、伝統の精神は学問における探究態度、学校の運営における目的追求などから、例えば自由、博愛などを標榜する型、あるいは少年よ大志をの如きアンビシャス型、あるいは徹底した無権威主義（実はこれが権威主義と転化するが）などをあげること

ができる。

鯉淵学園の同じ釜の飯以外に鯉淵精神を求めようとするときそれが学園の教育理念となつて定着しているものがあるのか、それとそれは、過去から探し出すべきものなのか、現在において創造されていくものか、或いはそれは将来に求めるべきものなのであろうか。そしてそれは指さし示すことができなものであるか。

鯉淵学園は間もなく創立三十年を迎える。三十年の時間はいま歴史がない、伝統がない、設備は悪いが、では許さない尊い時間の積み重ねである。最近、農林省が助成事業の五ヶ年計画をつくりこれをさらに二ヶ年修正した新五ヶ年計画というような助成の年次計画をもとにして学生寮、研究室、教室、体育館、本館、講堂そして農場ではビニールハウス、ガラス室、畜産設備などが昭和五十年ごろまでに完備することとなつているが、建物設備がよくなるに従つて中味の問題が恐ろしくなつてきているのである。折角、佛をつくつてみても魂の入らないものであつてはどうにもならない。

同窓会も創立二十周年事業以来いわゆる建物施設を中心に教育施設の充実強化強調し前述のように建物についてはほぼその目的を達しようとしているが、そうした設備の充実強化とともに茨城の風土の中にひっそりと築づかれつつあつた鯉淵の精神をさらに強く育てあげてゆかなくてはならないと考えるのである。

鯉淵学園に魂を入れる運動こそが創立

三十年の記念事業として考えてみる必要があると思ふのである。

農業教育、農民教育、農村教育といわれる事業が常に精神論を中心に展開されてきた。戦後それをきらつて近代的という教育が流行したが果して近代化を達成することができているか否かについては未だ定説をすら得ないところである。そして農業のおかれていく地位はそれとかけはなれたものとなつていく。

最近のように食糧自給率の低下、海外依存説そして農業の観光化論などいかなる現実をもつて対処してゆくかは、本当の農業教育の実践において他にないのではないか。

農業に机上論が通用しないと同じように、農業教育にも書齋論は通用しないことを当事者は肝に銘ずべきであらう。鯉淵学園にある鯉淵精神を確乎不拔のものとして鯉淵の地に太く、大きく育てあげてゆくそのことを学園三十年を迎えるにあつて提唱し学生、教職員、卒業生が実践してゆくことこそが本当に学園を発展させるものであると信じてうたがわないのである。



支部だより

神奈川・宮崎・長野・東京

神奈川県 支部長 山口次夫（一期）

前略― 市内の日興証券ビル内の糖価安定事業団、横浜事務所会議室において

三期の奥村氏が事業団に勤務しているので席を借りた次です。また同氏から色々御協力を賜りました。学園から先生をお招きするにはあまりにも貧弱なものであったので、敢えて中止したわけで御了承下さい。出席者は、一期、山口、二期、宮川、白木、三期、鬼武、奥村、森田、岡川、川島（旧中村）―名簿では静岡に入っているが、実は同期生の五明達夫氏と一語に木村業をしており、市内鶴見区矢向町で美杉木材KKにいます。五明氏方に連絡すればすぐ詳細はわかります。― 四期、市川、八期、葉丸、十期、竹内、十二期、井川、二十三期、小島、和田、以上十四名でした。

皆様、それぞれのところで御活躍されてお力強く感じました。十一月二日三日の学園同窓会の様子をざっと説明しておきました。また会費を各人納めるよう話しておきました。また、私が学園で感じたことは、ゲバ学生がなく、他校とは違った学校であることを強調し、同窓会

のつながりがとても強く、親近感があるので、これ等が特色であり、学園の良い点ではないかと申しておきました。

今後とも努力して続けてゆくと共に近い一から年一回の学園同窓会には出席するよう努力してゆきます。たとえ力は小さくても、一つ一つ完全なものや努力し、一隅を照らす気持でやってゆくようにします。大衆指導ということはあるべくして不可能でかつ美のないものですか、個人個人の力をつける以外にないのですから……支部も一人一人を強くし、つながってゆくという方針でやります。何百人もいなくてもよい。五人十人で結構です。実ある充実したものにした。大勢集って馬鹿騒ぎしてみても、結局なんでもない風船の爆発騒ぎに終るようなものです。たとえささやかでも、内容のあるものであれば、千人にも匹敵するものと存じます。学園や同窓会も世相の流行を追わず、本に返ってジツクリ進めてよいと存じます。わずかな力でも強い充実したものならよいと存じます。この見地からして、県支部は他に比して遜色なきものと存じます。愚見を述べ、かつ

支部結成大会開催

宮崎県支部

松垣士郎

前略、おかしなことに宮崎県には同窓会がなかった。そこで、八月十二日、宮崎神宮で結成総会を開きました。その模様をお伝えいたします。

参集したのは三十五名（一期から在校生まで）、司会は小生、発起人を代表して阪衛先輩のあいさつ、引き続き、全員の自己紹介、（自営の人、農協の人、普及員、通信教育生等）、議長、県共済連財産運用課長、熊本林（頭はうすくなり腹は出たけれどもまだ若い。）

協議事項は、

オ一号議案 同窓会宮崎支部結成並びに規約制定について

オ二号議案 昭和四十七年度事業計画並びに収支予算について

オ三号議案 昭和四十七年度会費の決定並びに徴収について

オ四号議案 役員選出について

予算の一部修正がなされた上、原案通り決定。

役員は

会長 中村正貴 4期
副会長 谷口保男 15期
副会長 長友厚子 24期

監事 白坂正治 5期
監事 杉田隼人 21期

この協議終了後、懇親会、場所が場所であり善段はおいしいとも思わない焼酒が格別の味、学園の門を出てから達ったことのない同級生と懐かしい話のくりかえし、一期の羽深先輩（ベビー洋品店経営） 四期の甲斐先輩（農政普及員）、四期中村先輩（宮崎新聞地方部）から見ると息子や娘のような二十六期の中山司二十五期の原さんたち、年令を問わず、焼酒を汲みかわし、鯉湖の様子を聞いていた。あの察は、あの栗の木は、あのバスは、あの駅は、そしてあの人は、最後にスクラムを組んで、大声をあげて、「遥かにかすむ筑波峰……」の察歌、宮崎神宮の森に響きわたった。――明日から宮崎県の農業も又変っていくかも知れない。

この同窓会の裏方を務めたのは、又今後も務めるであろうのは、事務局長、阪衛克己（自分では若いつもりだが）中央会、事務局員、興祐善彦（今も昔も変わぬ色白のハンサム男）共済連、同じく松垣士郎（世話好きのいい男）中央会の三名。

事務局は
宮崎県宮崎市旭1の3 農協会館 農協中央会内 阪衛克己、松垣士郎



若い同窓の集い

長野県支部

本年三月、長野支部より、事務局から是非参加して頂きたい旨の連絡が入り、「若い同窓の集い」に出席する機会を得た。出席者は十九期から二十六期生が大半で、少数の大先輩、とくに小林支部長（四期）は、下からの突きあげで四善八善のように見受けられた。

心あたたまる観望の中で、同窓会、学園の現状を報告し、今後の協力をお願いして帰路についた。

その後、会の世話役を務めた平松昭二氏（二十一期）より次のような一文を寄せていただいた。（高橋記）

韻略― この会は今から四年前、卒業生の歓迎と同窓生の親睦を兼ね、毎年三月上、中旬に、一泊どまりで行なっていたものです。唯長野県同窓生は多く、全ての人が集る事は無理と考え、二十期二十一期で二十三期卒業生を迎えたのです。以後四十四年より十九期を加え、案内状も、贈字若手同志の集いとして開催していただきました。

会が重なるにつれ、県支部長や我々より先輩もこの会に加えないか、という意見が出てまいり、昨年より支部長を筆頭に少数の大先輩に出席をお願いし今回に至った訳です。

特に今回は我々の前からの念願でありました学園よりの出席が得られ、尚充実した感じが致します。

唯残念な事に十九期・二十期（五十余名）中出席が半数という数は満足出来ません。小林先輩も言っておられました。大先輩でも案内状を出しても返事の来ない人が数多くおられる様子。又特に私達の経験では、卒業して一二年の間は、学園が恋しく、同窓生と逢いたいものでしたが、今回の場合をみますと二十五・六期の欠席が目立ちます。この事が阿となく学園の歴史を物語っている様にも思えます。何故なら我々の頃は案外とまとまっており、卒業してからも同窓生と、激論しあつたものです。

昨夜も二十六期牧君が見え寮の事を話していたのですが、自治の創体化（全寮制反対）の意見が出てきたのは「一」の原因は、寮生活をして何の益にもならない事とも思われます。外から見た限りでは寮の建設に問題があるのでなからうか、今まで古びた長屋の寮から、近代的なコンクリートの寮、これは開放的から封鎖的に、そして団体主義から個人主義になり学園の一つの精神である「切磋琢磨」が充分なされないのではないか、と素人的な判断をしております。いずれにしても、全寮制のない学園はクリープを入れないコピーとなるのではないでしようか。

この事について四・五週間の意見が揃っています。学園の様子をお聞きし、親立たしさと淋しさが入り混じり、私に怒の

思いを持たせた次で、そして、その対策として心のつながりを大切にせねばと、我々（同窓生）で大いに話し合うべきだ、仲間の学園を思う気持ちが何時までも一つになっている事、と同窓会の重要性を語っています。

是非、この意見に応える様、同窓会本部の活躍を期待しております。勿論、私達の出来る事はとどしとどし言つて下さい。

鈴木氏農林大臣秘書官に就任

―東京支部有志による―

歓迎会を開く―



同窓生の皆さん、お元気ですか、それぞれの分野でご活躍のことと思います。

この度、十一期卒の鈴木昭司さんが足立農林大臣の秘書官として就任されました。氏は代議士秘書として活躍されていましたが、就任以来、米雷など多くの問

題に対処されています。

これを機会に農林省勤務の先輩諸兄の発起により、歓迎会を開いたらとの話があり、計画しましたところ、同窓生多数の出席を得て、去る九月五日、大平町の全農会議室において盛大に行いました。

会は和田同窓会会長の歓迎の挨拶に始まり、鈴木秘書官からお礼の挨拶があり、北村先輩（二期、関東農政局）の発声により乾杯し、宴会に入り、出席者の自己紹介を兼ね秘書官へのお祝の挨拶を受け、宴が高まるにつれ、陣形型挨拶もあり深まる夜を忘れ、なごやかに歓迎会を閉会しました。

なお秘書官は十月十日から十八日までオーストラリアで開かれる日豪経済閣僚委員会に出席される農林大臣の随員として外遊されます。その土産話は本紙に機会をみて発表していただきたいと思っております。最後に秘書官の今後の活躍を期待して東京支部の近況とします。

（東京支部 福丸記）

筑波野に真理の姿求めつつ
夜明けの鐘が野辺にこだます

麗洲学園農場 小沼 四郎

これからの社会と人づくり

田中今朝美

(通教一期)

一、これからの社会に要請されるもの
これからの社会がどう変化していくか？

それは予測の域を出ないが、今日の日本はもはや一九八〇年代の未踏領域へ、手さぐりで突入するところまで来ているともいわれている。そこで、これからの社会の変化を4つの視点でとらえてみたい。

第一は価値観の変化を挙げる事ができる。時代、人間環境の変化と共に、今日の即物的で享乐的な考え方に起因している、物質的豊かさの反面ともいえる精神的貧困から目覚め、次元の高い価値観へ変っていくものと見られる。それは、目標の達成、新しいものを求める創造の喜びといった、精神的な自己表現の欲求が中心となり、多様化していくことが考えられる。

第二は生活パターンの変化である。今から一〇年後の生活について考えられることは、食生活はレジャー化し、住生活

は装置化し、レジャーも観光型から創造型や社交型が重視されるものと見られる。

とくに、人間の労働が貴重になり、人的資源や時間の面から一時間当たりの能率は、現在の5倍の価値を生まなければ、目標とする生活には到達できないともいわれている。従って、能率化し、合理化した生活が一般化するものと見られる。

第三には、工業化社会から情報化社会への変化である。「情報」は、「物質」、「エネルギー」と共に人間の生活に欠かせない三大要素のひとつともいわれている。情報メディアはその形態に著しい変化と多様化が予想され、テレビ電話、家庭ファクシミル、COMシステムビデオカセット、平面テレビ、オンラインシステム等が現われ、コンピュータによる自動化やシステム化スタイルが一般化するものと見られる。

第四には、科学技術の変化が挙げられ

る。未来社会の決定的な役割を果たすものが科学技術であるのは周知の通りである。その科学技術も探求され、磨きあげられたものが、社会システムの中に好ましい形で組み込まれるときに、真価を発揮し、豊かな社会が現実のものとなるのだと見られている。従って、産業構造もネットワーク産業、情報産業、知識産業といったものが脚光を浴び、技術革新は今までの三―四倍のスピードで進んでいくともいわれている。

このように目覚しく変化する社会に対応していくためには、何にもまして大事なことは「教育」であるといわれている。しかもその教育とは、読む、見るだけでなく、話し、聞き、触れる、とにかく全身を使って現場で学ぶことを基本とする創造性の開発である。この創造的学習は、生涯教育として体系的に確立することがポイントでもある。

二、人づくりに思う

「心の健康、明るい社会」これは、静岡県が昭和五五年を目標に樹立した、第八次総合開発計画のスローガンである。しかも、その計画の土俵を果すのは、「人間」であり、人間能力開発計画が主軸となつているところに特徴がある。それは、新しい時代に生きる新しい心の持ち主、創造性豊かなたくましい、そしてやさしい心の持ち主で、流動化する社会に適應する適性と能力の開発を強く求めているものである。

また、農業改良普及事業においても、「優れた経営の担い手を育成」すること

に、もっとも重きをおいている。それと
いうのも、これからの農業において、新しい時代の農業を創造し、開発する使命と役割をもった、スジガネ入りのエリート農業青少年に対する、期待の大きいことにはほかならない。

このように、人づくりが強く叫ばれている今日において、母校である「鯉淵学園」が一貫して農業の指導者養成に精魂を傾けてきて、発足以来三〇年にわたる長い歴史のなかで、農業の第一線で活躍する卒業生(通信教育終了生を加えて)四〇〇〇名を送り出している。このことは、日本の農業の発展に陰の力となつて大きく貢献しており、その功績は高く評価してよいものと思う。

昨年度でしたか「鯉淵学報」が新しく発行されたことは、学園と同窓生四〇〇〇名を結ぶ強いいきずなとして、心の糧として、情報としての役割を果たしてくれているものであり、大いに期待している。今後さらに内容が充実され、継続して発行されていくことを願っている。

(田中今朝美―通教一期)

俳句



角田勝男(総務課)

訪うに今は亡き人星月夜

また逢う日いつとなければどきわやかに

新米研究員の弁

千葉県嶺岡乳牛試験場

草地研究室長 鈴木仙次

(通教四期)

全国同窓会員諸兄姉の活躍ぶりを会報などで見聞し、同じ会員として本当に心強く感じております。

昭和四十三年三月に通教修了証を頂き、同四月に今まで勤務した普及所管内の市に畜産専任指導員として派遣され十七年間続けた普及所を一応離れ、酪農家の個別指導や市営乳牛育成牧場の建設に二年間費し、四十六年に現職に就き、一年余を経ました。いま千葉県嶺岡乳牛試験場草地研究室の管理をしております。過去畜産を特技とした普及活動をしていきましたが別段造詣が有るわけなし、大任を背負ったという感慨で毎日の業務が苦しくさえあります。然し好きな牧草をいじれたり、眺めたりできることで、部下職員と楽しく過しております。従って毎日毎日が勉強の連続です。当試験場は高価な優秀牡牛を隔年輸入して、県内乳牛の改良に努めており、北海道に次ぐ酪農県として、県の関係者も大いに熱を入れておられる筈です。その中に在って草地研究室では、本県南部に広がる急傾斜山地の開墾と牛の体質改善を目的とした乳牛の放牧試験、年平均気温十六度と温暖な地域であるので南方型の牧草を導入して、従来のオーチャードグラス、アルファル

フアと言った寒地型牧草との組合せなどにより年間青草生産を図るべく試験を重ねております。

一般にこの種試験場は人里離れた、辺りな処が多く外部との接点が少く、外的に知識に乏しくなりがちです。反面そうではないと落着いて試験もできないかも知れませんが、今日のように変転極まりない情勢に疎んでゆく心配もあります。これらの情報は種々な会議に出席して感知するか、新聞、雑誌などから得る外ありませんが、実際気懸りなことです。例えば最近農林省で発表した就農人口は全人口の十％をはるかに割り、率から見れば先進工業国並みとなり、GNP世界才二位と威張ってみたところで農家の力はどうであるのか、農業所得率は年毎に減少し、就農者の質的低下となり、更に就農人口は減少を辿る傾向と言われる、それが日本列島の改造となるわけでしょうが、吾々酪農関係者はほん床公害の面でも加害者となる立場から、尚一層の広汎な研究内容が要求されています。

こんな中において、先進農家の改善向上意欲、実績をみることは正に一服の清涼剤であり吾々にも新たな決意を与えてくれます。

昔から普及員の目標であった、**「考える農民育成」**も段々と企業的感覺も市場把握のもとに積極的な生産活動を行えるようになり成長した彼等に、技術を提供する試験場の使命も又重大となって来ますし、従来にも増した行政、普及との連携が必要と考えております。

又細かい話ですが、農家側では今すぐ役立つ身近なものも要求し、試験研究側では時代を先取りして何年も繰返し技術の確立をする関係では批判もありませんが、非力(予算などの外的要素も加えて)なことを痛感しています。農業の試験研究事業ではとかくこれらの事が問題になります。経営、技術解明の対応策を

模索する間に時代が流れ去ってしまったとか、正解が出ない、出るまで待てない事例は本当に多いようです。以上の文のように心千々に乱れ、何かを求めて懸命な現在ですが、改めて学園諸先生方の変らぬ暖かい御指導と全国同窓会員諸氏の御鞭達を賜りたいと考えております。

又事務局の皆様方の御健康をお祈りして、益々会の発展のため御尽力ありますようお願いいたします。

「同期の集い」

七期生会

九月一日

千葉県嶺岡乳牛試験場
草地研究室長 鈴木仙次

四月三十日に七期生会を開催致しました。今回は卒業二十周年目に当たり、十年目(名古屋)に次ぎ二回目でした。

会場は笠間市オーホテル笠間館別館を予定しましたが、久しぶりの学園を見学するために、午後三時学園に集合しました。久しぶりの対面で、互にとまどいもありましたが、直ぐ二十年前の雰囲気に戻り、先生方に説明をお願いして本部・教室付近、学生寮、農場などをみてまわりました。昔を留めるところは非常に少なくなりましたが、学園の新しい息吹きの一端(三ヶ年制、施設整備五ヶ年計画

など)をのぞいてまわりました。続いて記念植樹。新実験室(鉄筋二階建)の玄関両脇に石岡から取寄せた泰山木(もくれん科の喬木)二本を参加者全員が手に泥して植えました。生長の良い木ですから、十年後には見上げる程に大きくなり、良い記念になることでしょう。なお、十周年記念として図書館両脇に植えた三〇〇センチメートルの桜欄は、二メートル余にもなり、ア・ソ・デシタカ ミゴトニ大キクナリマシタナリ」となりました。

四時頃自家用車、ハイヤーに分乗して笠



八名、合計三六名でした。

二十年前目に席に着いた様子は、どっしりとした感じのなかにそれぞれ仕事に対する自信と気魄があるように見受けられました。しかし、一通り近況報告がすんだあとは、二十年前を再現して大変賑やかになりました。仕事のこと、家族のこと、今回出席できなかった同僚のこと、学園のことなど、酒を汲みかわしつつ夜の更けるまで話合われました。芸者六人を頼みましたが、芸者達は一つ釜につながる友情を自分達の方に引付けることができず、舞台でかつてに三味線をひき、唄って踊って帰りました。寝静まったのは二時か三時頃だったでしょうか。

間に向いました。

出席者は佐野和男(秋田)、佐々木羊三、鈴木実(以上岩手)、斎藤武雄(福島)、広原宗次、村山宝、岩本静之、松浦(小林)宏、増山(安達)勝、松田睦信、矢沢享、立見健祐、渡辺(辻浦)正信、岩崎文彦(以上茨城)、関口義明(群馬)、清水源也、加藤美代太(以上埼玉)、山下耕一(長男同伴)、大滝巖(以上東京)、内藤(肥田野)混、寺尾政勝(以上新潟)丸山(小西)仁志(長野)、斎藤重作(岐阜)、奥田勝巳、熊谷安孝(以上愛知)、粟井隆章(高知)、田代秀子、坪野敏美(以上学園)の二八名(名古屋では二三名)、招待者鞍田、石橋、近、新井、白田の各先生、砂田、(五期)、鈴木(八期)高橋(九期)の

翌朝食時、次の卒業三十周年は九州でと約束されました。その時は飛行機代をプールしようという話もでしたが、これはむしろかしいかも知れません。それは兎も角、楽しみにしていたいものです。お互いに忙しい忙しいといいますが、全部帰ったのは正午近くでした。全くの盛会で、出席下さった方々がもろなく喜んで下さったことをなによりと思っております。

出席下さった先生方、同窓生の方には御多忙のところ、しかも御祝儀の御心配までいただき誠にありがとうございます。また笠間普及所長の鈴木光雄兄には会場選定、準備において大変御世話になり、重ねて御礼申し上げます。さらに、今回出席を予定しながら急用で欠席された山田智良(山口)、山中(西村)種郎(三重)両兄より欠席おわびと記念

樹代として各五、〇〇〇円の寄付をいただきました。御報告すると共に厚くお礼申し上げます。

なお、宇都宮俊兄は別府市末広町三ノ一内田病院において中気療養中。はげましてあげて下さい。吉田辰男、関照雄、

二四期生各位殿

水二四期生会誌「純生」発行の会計報告について

「純生」の発行につきましてはご協力どうもありがとうございました。別記の通り会計報告いたします。

収入の部

千葉県人より繰越 一〇、〇〇〇

「純生」売上金 三四、八〇〇

(一一六部×三〇〇円)

同期生より助成金 一、八〇〇

計四六、六〇〇

支出の部

印刷費(二五〇部) 二二、〇〇〇

通信費 一一、〇〇〇

原稿収集

切手、はがき

その他、発送費用

編集諸費用 一一、六〇〇

(県人会七回開催)

計四六、六〇〇

おわび 編集の訂正

トビックスのところ「大高君も農協

三浦清寿兄は住所不明。ご存じの方は事務局まで御一報下さい。また、津渡達郎、松本勉、東山宏、古川修、山本幸宏(実科)氏は故人とされました。皆様と共に御冥福をお祈りしたいと思います。(坪野)

を退職して……」とのせておりますが、編集のミスで、彼は現在も能代市農協で頑張っておられます。

「事務局よりひと言」

会報(純生)は毎年発行ではなく二、三年に一度発行する方がよいのではないのか。

「理由」

一、毎年発行となると話題はあっても、原稿集めまた編集が困難である。一寄稿者が限られてくる。

二、また、あまり間隔をおき過ぎると、通信交換の場がなくなり、いざ発行したいとなっても住所も不明な人が多いのではないか、などの理由があげられる。

なお、次回編集は栃木県人に依頼しております。

いつまでも「この手の温み忘れめや」で続けましょう。

ひょうごけんじん

二四期生一同

学生募集の協力方について

学園長 秋 浜 浩 三

晩秋の候、卒業生の諸兄いよいよ御清
祥のことと拝察します。

さて、ついこの間、新一年生を迎え
れたと思つていましたが、もう来年の学
生募集期が近づいて参りました。

私どもは、将来の日本農業を、あるい
は農家の生活を改善発展させる人材の養
成を目指して努力をつくしている次第で
ありますが、そのためには、優秀な後継
の確保が第一条件であることは申すまで
もありません。

ところが、この数年の趨勢は、楽観を
許さない状況にあります。御参考までに
この数年の出願状況を御紹介しますと次
の通りであります。

年度	定員	出願者数	入学者数
昭和43	160	414	171
44	160	403	145
45	160	201	133
46	160	145	105

このように出願者及び入学者が減少し
てきた理由は、学園内部の事情よりも社
会一般の事情の変化によるものと考えら
れます。それだけに、余程努力しないと
優秀な新入生を定員どおり確保すること
が困難な状況にあります。

そこで、本年より学生募集のためのP
Rを従来の比へ強化して進めております。

(高校生の受験雑誌への登載等。)

また、教育施設の充実整備についても、

農林省の強力な支援を受けて着々進めて
おります。すなわち、昨年からは本年にか
けて基礎実験室、園芸実験室、畜産実験
室、女子寮一棟を着工もしくは竣工し来
年度以降、男子寮、教室、講堂学生ホ
ール等、年次計画に従って新築が予定され
ております。農場方面も、近代的な施設
園芸の設備(約六〇〇㎡)はじめ、園
芸農場農場とも農業教育機関としては
なかなか程度の設備の充実が推進さ
れております。

しかし、施設設備がいくら充実しまし
てもこれを利用する学生が予定どおり入
学してくれなければ何にもなりません。
以上の実状を御覧の上、一人でも多く、
優秀な意欲旺盛な新入生を御推せん下さ
るよう、切にお願い申し上げます。最後
になりますが、諸兄の御健康をお祈り
申し上げます。

著者紹介

造園木の平引

さし木の理論と実際

森下義郎・大山浪雄 共著

本書は、さし木についての基礎的な知
識、発根生理、さし穂やさし木の各種条
件と活着との関係、活着増進対策、実際
のさし木の進め方などについて、多くの
新しい資料を入れて取りまとめ、さらに
園芸用草木類など計五七〇余の広範囲の
ものについて、それぞれさし木の難易お
よびその特性に応じたさし木法の要点を
一覧表として掲げている。従つて、業苗
専門家や普及員、指導員等の学術参
考書、実務書としてのみならず、この方
面に興味を持つ一般の方々の手引書とし
ても、またとなり好著である。

著者の一人、大山浪雄さんは、造園学
園の三期生、在学時代から、現在の同窓
会会長、和田文雄さん(農林本省)らと
共に林木の研究を手がけられ、昭和二三
年卒業と同時に農林省林業試験場に勤務
三六年には「さし木困難樹種の発根能力
増進に関する研究」で、農学博士となり、
現在、農林省林業試験場九州支場育林考
一研究室長として活躍しておられる。

発売元：地球出版(住所：東京都港区
赤坂四一三二五、振替口座：東京一九五
二九八番、電話：〇三三・五八五・〇〇八
七)、A五版、三六七ページ、二〇〇〇
円、装釘も堅牢で美本。七冊以上の注文
は一割引の由。卒業生は勿論、職場等の
近隣知友を勧誘して、どしどし申込み
下さい。(事務局)

今田忠雄著

「畜産物生産費計算の実態」

著者は学園の才五回卒業生である。昭
和二二年に卒業されてから、農林省東京
統計調査事務所に勤務され、その後本省
の統計調査部で畜産物生産費調査を担当
されて約一〇年間、此の道一筋に努力さ
れた。わが国の畜産は、昭和三〇年代後
半より特に急激な発展をみせたが、此の
間、これに呼応して生産費調査も大いに
充実してきた。この時期に必要などの生
産費調査とは異なり、未開の分野の多い
畜産物生産費調査についての開発は、並
大抵な苦労ではなかったことと推察され
る。

本書は五〇〇余頁より成る大著で、著
者の一〇年余にわたる豊富な経験をもと
に集大成されたものである。同窓の一人
として、この今田学兄の力作を紹介でき
ることは大変嬉しい。内容は五編に分か
てあり、才一編総説、才二編畜産物生産
費調査の方法、才三編自給物の費用償計
算、才四編生産費の分析方法、才五編生
産費計算の資料と解説となつている。本
書の力点は才二編にあると思われるが、
各家畜・家畜毎に生産費調査の方法が極
めて具体的に述べられている。紹介者も
大いに利用させていただいて一人であ
るが、畜産物の生産費計算をしようと
するものにとつては、必読・必携の好著
である。(抄田)

博友社 四六年十二月刊 三五〇〇円



支部長会議開催決る

一月十四日～十五日

去る九月二日、役員会を開催して、支部長会議開催について審議いたしました。その結果、十一月三日四日に開くことに決定し、事務局としてもそれなりに、会議の準備や各支部への連絡をしまいにしました。

しかし乍ら、議題や日程については、役員会の席上、後日学園との意見調整をはかるとの決定もあり、事務局としても苦慮しておつた矢先、会長より、「当日は公用で出席できず、会議の中心議題と考えられる同窓会館の設立について、提唱したこともあって是非出席したい旨を強張され、一月十四日十五日の連休に延期して開催してはどうか。」と指示されました。

早速、茨城の代表者とも連絡をとり、協議した結果、事務局としても、準備の都合上延期することが望ましいとの判断に立ち、会長の指示通り、昭和四十八年一月十四日十五日の両日に開催することに決定しました。

才一回支部長会議は二十六都府県より参加をみて、中央協同組合学園の設立と農協科の廃止について議論を呼び、才二回は二十一都府県から参加、鯉淵学報

学園の将来計画について、熱心な審議が行われ、それなりの成果を生みました。才三回支部長会議は、学園の改善改善計画も途につき、連日のように建築の響が聞える今日、同窓会として一期を画する感りあがり期待されます。

昨日も栃木支部会に出席する機会を得ましたが、その中で、支部長といわず、是非一期の先輩は全員招待して、との声を耳にしました。

こうした声に充分耳を傾けて会議の準備をしたいと思っております。各支部とも御意見をお寄せ下さい。

審議の結果は、各支部に持ち帰り、支部の皆様と呼びかけやお願いが行なわれることと思えます。そして、再び鯉淵に大きな力となって結果されることを念じています。

同窓生からの便り

前略——先日種子島に渡り、二十年振りに同期の梶田三九君、十期の鮫島健生君と旧交を温める機会を得ました。同窓諸氏の各地での御活躍に劣らず、大々精

一杯努力している姿に接し、意を強くした次第でした。梶田君は建設課長代理、鮫島君はすぐやる係長、ともに小生の訪島を大歓迎、花木調査にも協力して戴きました。

小生、現在、故郷の農協において組合長をしており、困難な農業情勢の中で四苦八苦し乍ら要請に応えようと努力しておりますが、何よりも頼りにしたいのは各種の情報です。全国同窓の方々の御協力を誰よりも乞い願っている次第です。特に、現在私が求めておりますのは花木（植木）関係の情報です。今年度から農協事業として企画したために、同窓生の中でこんな仕事に取り組んでおられる方、又は農場、農協等、又、これらの研究に従事されておられる方がありましたら御教示願えれば幸いです。

鹿児島 八期 中島 孝

前略、先般訪日の折には、御多忙中突然失礼致しました。又、丁寧な御接待並びに御案内、大変ありがとうございました。

おかげ様で皆様にお会いすることが出来、又、変らぬ美しい茨城の自然、発展に伴って移り変わる学園の新しい姿に接する機会に恵まれ、実に楽しく、有意義な思い出となりました。

私はその後、七月二十三日羽田を立ちロスアンデルス、メキシコ、シテイおよびリマに寄り二十四日午前十時、無

時サン・パウロに着きました。タラップを降りながら、ブラジルの澄みきった空気を胸いっぱい吸い込んだら又、新しいアイデアとフアイトがわいて来りました。諸先生方並びに同窓生の皆様にもよろしくお伝え下さい。

近 磯和(十三期)

小松崎君「青年の船」で

海外視察へ

二十五期の小松崎君は、「青年の船」に才六回生・一般団員として乗船することになりました。

期間は十月十六日より十二月十四日に至る六十日間。訪問国はフィリピン、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランドの四ヶ国、巡航先で各国青年との親善交歓と相互理解、日本文化の紹介、各地の視察、見学などを通して国際的視野を広めてくることになっております。

人事移動

採用 松本正芳 47 4 1 酪農場所属
(経営伝習農場研究科卒)

採用 安藤義道 47 5 1 教務課所属
(教育大学大学院修士課程卒)
退職 大出節子 47 8 1

鯉淵学報発行決る

本年早々、学園に対し、鯉淵学報を同窓会より引継いで載くよう申し入れましたところ、この申し入れを容れ、学園の立場にたつて本事業の推進と発展を図ることを約束されました。

此の度、鯉淵学報（仮称）発行計画案が教授会に提案され、審議の結果、大綱は原案通りとするも細部については今後検討することとし、とりあえず本年度は三月に発行することに決定しました。

鯉淵学報の発行を軌道に乗せるためには、同窓生諸氏の協力が必要です。原稿募集配布について、創刊号と同様の支援と御協力をお願いいたします。

尚、提案された発行計画案のあらましは次の通りです。

鯉淵学報（仮称）発行計画案

一、刊行のねらい
 広汎多岐にわたる学園関係者から学識経験の成果を濃縮結果し、学園教育活動の補完的役割を担うべき農業ならびに農村生活に関連性を持つところの教育、研究の資料を作成配布することによって関係者相互間の学問、経験上の交流促進を図り、学園独自の学風を基礎を固め、これを高揚することを目的とする。

二、編集方針

(1) 形式について
 B五版、七〇頁程度とする。うち六〇頁を二分し、学園教職員三〇頁、卒業生

三〇頁分の寄稿を予定する。残り一〇頁を予備とし、特別寄稿者用、学園側の取材記事、その他調整用に充てる。

(2) 内容について

内容は学術研究のみに限定することなく、学園教育との関連において有益と認められるものを広く考える。

三、実施要領

(1) 原稿の作成と依頼

学園教職員は学園長からの寄稿依頼に応じ原稿提出の義務を負うものとする。卒業生の場合、学園長は同窓会事務局を通じ、標準量の寄稿者を募集する。特別寄稿者については随時学園長より依頼する。

(2) 寄稿者の決定と原稿提出期限

寄稿者の決定、六月末日
 原稿提出期限、一二月末日

(3) 発行部数

当分の間 一、〇〇〇部
 五〇〇部 学園引受
 五〇〇部 同窓会引受

四、名称の検討

名称の妥当性を再検討する。

事務局だより

一、海外視察旅行募集についてお詫び
 日本通運の協力を得て行なう予定でありました「ヨーロッパ農業事情視察旅行」については、申込者五名でその中から取消しが出るなど苦慮しておった矢先、日本通運より海外事情の悪化、とくに、コースの中に取りましたイスラエルに立寄ることが困難になったと言うことを理由として中止せざるを得なくなったとの連絡があり、中止のやむなきに至りました。

申込みをされた皆様を始め関係各位に一方ならぬ御迷惑をおかけ致しました。深くお詫び致します。

二、会費納付について
 会費の納入状況は年々好転はしていませんが、昭和四十七年度は毎年一割納入していただいている新入会員が三年制移行にもなつてなく、全体としてみると収入減が予想されます。こんな状況ですの、会費未納の方は昭和四十七、四十八年度分、一、〇〇〇円を納入されるようお願いいたします。

尚、事務効率を高めるために既に納入された皆様にも振替用紙を同封いたしましたので御了承下さい。

三、事務局の現状とお願い
 同窓会事務局の運営は何年も前から結

果的に限られた人達によってなされております。このことを改善すべく、学園に協力をお願いしたりしておりますが思うようには進まず苦慮しております。

こんなこともあって、会員の皆様に連絡がわかれたり、いろいろ迷惑をかけております。事務局の現状を御理解いただいて、今後とも御協力をお願いいたします。

編集後記

六月に発行する予定であった会報十七号、いろいろ都合で今頃になりました。期待しているであろう会員諸氏にお詫びいたします。

いままでの会報には通教卒業生の投稿はほとんどと言ってよい程ありませんでしたが今回は二名から寄せていただきました。

今回は支部長会議の様子を中心として発行したいと考えております。広く、会員から原稿をお願いし、よりよい会報が皆様に届く様に努力したいと思います。

